

平成 26 年 1 月 24 日

全商協会会員校校長 殿

全国商業高等学校長協会
公益財団法人全国商業高等学校協会
理事長 戸田 勝 昭
(公 印 省 略)

「商業教育研究」第 65 号の訂正について

拝啓 時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

平素から当協会諸事業に格別のご協力を賜り誠にありがとうございます。

さて、既に平成 25 年 12 月 6 日付にてご配付済みの「商業教育研究」第 65 号につきまして、誤りがございました。関係の学校には大変申し訳なく深くお詫び申し上げます。

つきましては、ご多忙のところ誠に恐縮ではありますが、下記の点をご確認いただきますようお願い申し上げます。

敬 具

記

「商業教育研究」第 65 号

【訂正】

- ①P.32 「平成 25 年度学習指導計画表（シラバス）3 学年」が掲載されておられません。
- ②P.95 第 2 分科会講評が記載されておられません。
添付資料と差し替えをお願い申し上げます。

【添付資料】

- ①「平成 25 年度学習指導計画表（シラバス）2 学年・3 学年」 1 枚
- ②「第 2 分科会講評」 2 枚

※添付資料は、当協会ホームページ (<http://www.zensho.or.jp>) 「書類ダウンロード」よりダウンロードできます。

以 上

平成25年度 学習指導計画表(シラバス)

学科名	指導学年	教科名	科目名	単位数
商業科	2年	商業	コミュニケーション	2単位
使用教科書(出版社)	副教材(出版社)			制作担当者
なし	アサーション 自分の気持ちの伝え方(主婦の友社)			安東 裕二 秋月 麻衣 末澤 篤

到達目標	<p>社会生活に必要なコミュニケーションのための知識とスキルの習得を目的とし、以下の2点を目標とする。</p> <p>1) コミュニケーションを通して他者との間で情報のやりとりを適切に行い、共同で問題解決を行う能力と態度を育てる。</p> <p>2) コミュニケーションを通して、他者との良好な人間関係を築き、維持する能力と態度を育てる。</p>
評価の観点	<p>① 関心・意欲・態度 コミュニケーション活動中に主体的に発言し、非言語的表現(視線、表情、動作、声調)を用いて、わかりやすく、自分自身の考えや意見を適切に伝えることができる。</p> <p>② 思考・判断 目的に応じて言語・非言語的表現(視線、表情、動作、声調)を用いて、わかりやすく、自分自身の考えや意見を適切に伝えることができる。</p> <p>③ 技能・表現 コミュニケーション活動中に主体的に発言し、非言語的表現(視線、表情、動作、声調)を用いて、わかりやすく、自分自身の考えや意見を適切に伝えることができる。</p> <p>④ 知識・理解 コミュニケーション活動中に主体的に発言し、非言語的表現(視線、表情、動作、声調)を用いて、わかりやすく、自分自身の考えや意見を適切に伝えることができる。</p>

学習内容(単元・章・項目)	具体的学習到達目標(評価基準)	評価方法	評価の観点
			①②③④
1 エンカウンターグループ1	クラスの雰囲気になれ、自己開示できる環境をつくる	演習態度	○
2 エンカウンターグループ2	グループで話し合い、協力し表現することを体験する	発表	○
3 WHO AM I ? 自己概念を知る	自分自身がどのようなイメージを持っているかを知る	レポート	○
4 自分の話し方・聞き方の検討	自分のコミュニケーションの問題点についてふりかえる	定期考査	○
5 挨拶が相手にとってよい話し方	ミス・コミュニケーションの手続きに気づくことができる		○
6 説明スキル演習1	わかりやすく話を組み立てることができる		○
7 説明スキル演習2	受け手の反応や知識に基づいて説明することができる		○
8 説明スキル演習3	他者の反応を敏感に察知することができる		○
9 説明問題を取り戻すスキル演習	要点を簡潔にまとめ、明確に伝えることができる		○
10 小論文コンペティション応募	スピーチを前向きとした文章表現ができる		○
11 大塚大17歳のメッセージ作成	公共性を意識した文章表現ができる		○
12 プレゼンテーション基礎演習1	プレゼンテーションソフトを活用することができる		○
13 プレゼンテーション基礎演習2	受け手に理解しやすいように内容を構成することができる		○
14 意見を組み立てる	問題を提起し論を展開し結論を導くことができる		○
15 発想の基礎トレーニング	思い込みの影響を理解する		○
16 命題と逆・互・対・例について	論理的に内容を構成することができる		○
17 ならは…の基本トレーニング	根拠に基づいて論を展開することができる		○
18 論理的思考・判断	論理的に考え、判断することができる		○
19 ベンツックロジカルスキル演習1	結論からわかりやすいように内容を構成することができる		○
20 ベンツックロジカルスキル演習2	WHY(結論)⇒WHY(理由)⇒HOW(手段)		○
21 ベンツックロジカルスキル演習3	結論⇒理由、全体⇒詳細(グループ化)		○
22 アサーションとは	アサーティブなものを見方・考え方を身につける		○
23 8つのタイプの自己表現	適切な自己主張ができる		○
24 アサーショントレーニング基礎1	自分の気持ち・考えを正確に伝えるスキルを身につける		○
25 アサーショントレーニング基礎2	周囲の状況や相手の反応を察知するスキルを身につける		○
26 アサーショントレーニング基礎3	要求や希望を明確に表現するスキルを身につける		○
27 アサーショントレーニング基礎4	ことば以外の態度を活用するスキルを身につける		○
28 ビア・サポート傾聴トレーニング基礎1	相手の気持ちに傾きを向けその言葉を受けとめる		○
29 ビア・サポート傾聴トレーニング基礎2	相手の表情や身体や声のサインに目を向ける		○
30 ビア・サポート傾聴トレーニング基礎3	相手と同じ位置、目線と同情的でなく共感的理解に努める		○

* 期考考査(3回)のみ実施する。評価における定期考査(筆記試験)の割合は、50%程度とする。

平成25年度 学習指導計画表(シラバス)

学科名	指導学年	教科名	科目名	単位数
商業科	3年	商業	コミュニケーション演習	3単位
使用教科書(出版社)	副教材(出版社)			授業担当者
なし	福と言葉を上手に使引NLPの教科書(実務教育出版) コミュニケーション基本テキスト(JMAM)			安東 裕二 秋月 麻衣

到達目標	<p>社会生活に必要なコミュニケーションのための知識とスキルの習得を目的とし、以下の2点を目標とする。</p> <p>1) コミュニケーションを通して他者との間で情報のやりとりを適切に行い、共同で問題解決を行う能力と態度を育てる。</p> <p>2) コミュニケーションを通して、他者との良好な人間関係を築き、維持する能力と態度を育てる。</p>
評価の観点	<p>① 関心・意欲・態度 コミュニケーション活動中に主体的に発言し、非言語的表現(視線、表情、動作、声調)を用いて、わかりやすく、自分自身の考えや意見を適切に伝えることができる。</p> <p>② 思考・判断 目的に応じて言語・非言語的表現(視線、表情、動作、声調)を用いて、わかりやすく、自分自身の考えや意見を適切に伝えることができる。</p> <p>③ 技能・表現 コミュニケーション活動中に主体的に発言し、非言語的表現(視線、表情、動作、声調)を用いて、わかりやすく、自分自身の考えや意見を適切に伝えることができる。</p> <p>④ 知識・理解 コミュニケーション活動中に主体的に発言し、非言語的表現(視線、表情、動作、声調)を用いて、わかりやすく、自分自身の考えや意見を適切に伝えることができる。</p>

学習内容(単元・章・項目)	具体的学習到達目標(評価基準)	評価方法	評価の観点
			①②③④
1 NLPの基礎知識	セルフ・インボーションをマニピュレーション	演習態度	○
2 アウトカムの設定	各自のコミュニケーションの問題点とリソースを調べる	レポート	○
3 アサーティブな表現	問題解決のためのDESC法を理解する	発表	○
4 ポジティブなイメージ	ノンバーバルコミュニケーションの要素を理解する	定期考査	○
5 「リアレンジング」トレーニング	例の根拠を押し直し新しい意味や可能性を創出することができる		○
6 「メタモデル」トレーニング	会話に潜む省略・一般化・曲解を発見することができる		○
7 「リフレーミング」トレーニング	自分以外の立場や視点に立つて表現することができる		○
8 「アサーション」トレーニング	自分も相手も大切にしたい自己表現をすることができる		○
9 ビア・サポート傾聴トレーニング演習1	クロス・フォワード・フックを使うことができる		○
10 ビア・サポート傾聴トレーニング演習2	相手の話を整理し、伝え直すことができる		○
11 フレームワークトレーニング「列挙」	「列挙」スキルを使い、ポイントを明確化して表現することができる		○
12 フレームワークトレーニング「時系列」	「時系列」スキルを使い論理的に話を組み立てることができる		○
13 フレームワークトレーニング「比較対照」	「比較対照」スキルを使い、仮説を説明することができる		○
14 フレームワークトレーニング「演繹」	「演繹」スキルを使い、前提から結論を導く自己主張ができる		○
15 フレームワークトレーニング「5W1H」	「結論」スキルを使い、原因を明確にし提案をすることができる		○
16 ロジカルスピーチスキル演習「問題提起」	問題を提起し、論を展開することができる		○
17 ロジカルスピーチスキル演習2「根拠」	根拠に基づいて論を展開することができる		○
18 ロジカルスピーチスキル演習3「サポート」	論の根拠をサポートする具体的な論拠や例をあげることができる		○
19 ロジカルスピーチスキル演習4「反論」	反論を論議し、再反論することができる		○
20 ロジカルスピーチスキル演習5「再反論」	論理的に内容を構成することができる		○
21 討論スキル演習「質疑」	他者の発言を正しく理解することができる		○
22 討論スキル演習2「回答」	根拠を明示して意見を述べることができる		○
23 討論スキル演習3「価値観」	いろいろな価値観に気づきながら相互の理解を深める		○
24 討論スキル演習4「コンフリクト」	意見が食い違った時どのように処理すればよいか考える		○
25 討論スキル演習5「コンセンサス」	全員が同意によるコンセンサス法を体験する		○
26 プレゼンテーションスキル演習1	受け手の関心を引くように内容を構成することができる		○
27 プレゼンテーションスキル演習2	決められた時間内にプレゼンテーションをまとめることができる		○
28 リーダーシップスキルトレーニング1	目標を明確化し、共有化し、協同して問題を解決することができる		○
29 リーダーシップスキルトレーニング2	メンバーグループをサポートすることができる		○
30 リーダーシップスキルトレーニング3	問題を顕微鏡させたり、防壁したり、葛藤の問題を認めることができる		○

* 期考考査(3回)のみ実施する。評価における定期試験(筆記試験)の割合は、50%程度とする。

* 大塚大17歳のメッセージ作成

山本指導講師の講評（要旨）

第1発表の群馬県立伊勢崎商業高校について。群馬県の商業高校は、どこも元気があり、資格取得に限らず、部活動も強い商業高校が多い。

今回は「職業会計人への挑戦」というテーマでの発表である。規範意識が高く、地域社会に貢献できる会計人を育成する目標を掲げている。商業教育は「人づくり」と言われるが、まさに人間力の育成に取り組まれている。

特に、伊勢崎商業高校では、簿記会計の科目目標として「会計倫理教育」すなわち、「簿記の力は仕訳にあり」そして、「会計の社会的意義を教え、会計の倫理と責任を自覚させる」「簿記会計を通じて健全な高校生を育成する」としっかりと軸を建てている。

具体的な取組としては「目指せ あいさつ日本一！」を掲げ、地域社会から信頼される学校になっている。金融教育では、文化祭での出店で、仕入れ業務から、原価管理・会計処理・収益分析等の一連の販売実習、インターンシップや社会人講師による講話、卒業生による職業啓発などの体験学習を重視されている。そして、高校3年間と大学4年間の合計7年間を通じて、生徒の「志」を実現するために、「高大連携事業」取り組まれている。しかも卒業後アフターケアもしっかりとやっている。

ある方が、「現代社会において、空腹の人に魚を与えるのは間違いだし、魚の釣り方を教えるのも間違いで、正解は魚の釣り方を自分で考える方法を教えること」と述べている。

商業教育は、社会や経済を逞しく生き抜いていくことができる人づくりであり、「自立した生徒」、起業家の視点をもってビジネス・チャンスをつかむ「活力のある生徒」を育成しなければならない。そういう意味で大変素晴らしい取り組みである。

第3発表の福岡県常葉高校、公立古賀寛成館高校の発表について。今度の学習指導要領では、改善の柱の一つとして「思考力・判断力・表現力等の育成」と言われている。これらを育むためには、①報告、発表、それを聞く態度を重視した学習活動、②話し合いや討論を重視した学習活動などの「言語活動を充実」させることが大切である。また、「学習評価」については、「指導と評価の一体化」、きめ細かな指導の充実や一人一人の学習の確実な定着を図るために、「観点別学習状況の評価」が言われて久しい。しかし、なかなか高校では小中に比べて定着していない。「知識・理解」の観点が評価の中心となっているのが現状である。

発表は、言語活動の充実を目標とした簿記教育の試みとして「仕訳帳・元帳」の指導を題材とした考察である。よく、簿記では、「パターン学習、検定簿記に偏りがち」「検定試験のための学習で終わっている」「丸暗記・詰め込み教育」などの検定のデメリットが多く指摘されている。

「なぜ」「どうして」という素朴な疑問が解けたときに生徒の関心意欲はスパークする。考えさせる授業、生徒の考える力が伸長されるような工夫改善が大切である。

「どうしてそうなったの？」「それはつまり？」「というつまり？」といったように、「Yes, No」でなく、自分の言葉で答えられるようにする。指導とは、“聴くこと”、“待つこと”であると考え。重要なのは、答えそのものではなく、どうしたらその答えが導き出せるか、そのプロセスを大切にすることである。

ビジネス、とりわけ第3次産業が主流の現代、人と人の間でサービス業務は成り立っているため、コミュニケーション能力は不可欠である。これからは組織の一員として必要なコミュニケーション能力や利害関係者との関係を構築するコミュニケーション能力の育成を図る必要がある。従来から商業教育は、人間と相対する学習場面を積極的かつ意図的に教育内容に取り入れてきた。例えば、簿記会計では、インターネットを利用し、企業の財務諸表の分析し報告し合い、ディスカッションを行うことで、ディベート力を向上させるなどである。経済のグローバル化、グローバル化人材の育成が叫ばれている。自らの考えを提案する「プレゼンテーション能力」、他人と議論を交わす「ディスカッション能力」、そうしたやり取りをする中で、自分自身の存在を示すことのできる「プレゼンス能力」を身につけさせる必要がある。

言語活動の充実を目指した簿記教育という、核心に触れた示唆に富んだ素晴らしい発表である。

新井指導講師の講評（要旨）

第2発表は、埼玉県川口市立川口総合高等学校の渡部浩一先生による、新学習指導要領に基づいた教科「簿記」における指導方法の一考察 ―連結財務諸表の作成に向けて― というものであった。企業を取り巻く環境の大きな変化に対応した「簿記」の、一歩進めた指導方法についての発表であったが、段取りをきちんと踏んで大変明解にわかりやすくお話しいただいた。

年次進行で始まった新しい学習指導要領では、「財務会計Ⅰ」の連結財務諸表に、ア. 連結財務諸表の目的と連結の範囲、イ. 連結財務諸表作成の基礎とあり、イについては、続く内容の取扱いで、「基本的な資料により連結財務諸表を作成する方法を扱うこと」とあり、従来の学習指導要領に示された連結財務諸表の内容を更に進め、作成方法の扱いを求めている。そうした中で、連結財務諸表の作成を意識した本支店会計についての効果的な指導方法を示していただ

いた。

はじめに、連結財務諸表の作成方法が学習内容に追加された背景、そして連結会計を取り巻く現状についてお話しいただいた。現在、多くの企業が経済活動を拡大し、経営の多角化や国際化が進む中にあるのは、簿記会計の学習においても連結財務諸表についての学習は、ますます重要度が増しているといえる。しかしながら、本日の発表でも、四つ目の会計基準として、エンドースメントIFRS（国際財務報告基準）として話があったが、現在、日本基準、米国基準、プアIFRS（元となる国際財務報告基準）、そして四つ目となるエンドースメントIFRSの四つの基準が存在するわけである。

我が国は、企業会計基準委員会（ASBJ）が、日本初の民間そして独立の会計基準設定主体として、国際財務報告基準と日本の会計基準との差異を解消し、収束させる活動を行うものとして、平成13年に設けられたわけであるが、国際化の社会では、なかなか統一された基準に落ち着くということは難しく、こうした点についても、揺れる基準として大変具体的に説明をいただき、課題が明らかとなった。

続いて、連結財務諸表についての指導上の留意点として、個別会計と連結会計の視点の違い、また、個別財務諸表と連結財務諸表の作成方法の違い、そして、個別会計と連結会計の処理の違い等についてお話しいただき、指導上の問題となる部分を変えやすく示していただいた。そして、「簿記」の学習内容の一つである本支店会計と連結会計の類似性から、指導方法を試案として示していただいた。

特に、会計帳簿外での処理を意識した未達事項の仕訳、連結会計を意識した本支店合併精算表の作成では、「財務会計Ⅰ」での連結財務諸表の学習に大変効果をもたらすと考えられる。実際、試案実施の効果として、本支店会計と連結会計の相互理解の向上や連結会計に対するアレルギーの急減等、具体的に示され成果が上がっている。しかし、「簿記」から「財務会計Ⅰ」への引き継ぎ等の教師側の課題や、本支店会計分野の指導時間の増加による指導計画の再考、副教材の改訂といった課題があげられているが、十分な実施成果をあげるためには、校内における教科内での十分な意見交換や情報交換を行い、しっかりとした指導計画を立てた上で実施をしなければならない。また、会計基準の変更に対する教科書等の早急な対応が確かに求められるが、教科書という性質上、時間的な問題等難しさがあるのも事実である。

今後の課題として、実際はPCやソフトウェアの著しい発達から、本支店集中制度に移行され、支店独立会計制度は現在も使われているのかとの疑問から、支店独立会計制度の指導は不要と受け取れるお話もあったが、初めて「簿記」を学ぶ生徒にとっては、やはり基本の部分から学習することが大切であり、実際からは離れるけれども、学習項目としてはそれなりに意味があるのではないかと思う。しかし、限られた単位数、時間数の中での指導は厳しいのも事実である。

渡部先生の、本日の本支店会計の指導方法については、すでに教科書としても出版されているわけで、申し上げることもないが、簿記会計は何と言っても「商業」の中心科目の一つであり、引き続きこうした新しい指導方法を研究され、いろいろな機会に示していただきたい。更なる研究の充実・発展、活躍に期待したい。